



*miho Hatanaka,*

同じ看護学生でも、看護師になることを目指している学生と助産師を目指す学生とでは視点も少し異なる。もちろん、心理学を担当する1年生と、助産学の特別講義で会う4年生との違いもあるだろうが、「いのち」について学ぶ動機の違いは大きいと感じる。今回は助産学生への講義の話と、彼女らによる「いのち」の“詩”を。



【第23話 いのちのうた 8 : 大人のコトバ】

以前、京都の大学で助産師を目指す学生に対して「親役割援助論」という科目の講義を受け持っていた。その当時携わっていた厚生労働省の「こんにちは赤ちゃん事業（乳児家庭全戸訪問事業）」の仕事や区役所での母子保健指導等の経験を踏まえた内容を担当した。家庭訪問は生後早期の乳児のいる母子が対象で、「様々な不安や悩みを聞き、子育て支援に関する情報提供等を行うとともに、母子の心身の状況や養育環境等の把握及び助言を行い、支援が必要な家庭に対し適切なサービス提供につなげる」とうたわれている。病院等の施設では分娩を中心としたケアがメインになるので、卒後、多くは施設で働く学生に“お産を終えて家に帰った母子の現実”に触れさせることは意義がある。母子にとってはそこそが“日常”となる場で、助産師がどのように関わることができるかを考える授業でもあった。必須となっている分娩介助などの実習もほぼ終え、年が明けたら国家試験のための勉強が始まるという時期の講義では、学生もこれまでに学んできたことと照らして理解しようと努めて熱心であった。

出産という大きな仕事を終えたばかりの母親にとって、型どおりにはいかない育児は特に初期では戸惑うことも多く、“生命の誕生”という“崇高な”場に目を奪われがちな学生には母親からこそ多くのものを学んでほしいと願う。「指導」を掲げて向かうと、必要なものは届かないように思う。教科書に書かれていないことがそこにはある。

「いのち」

作：K大学の皆さん

赤ちゃん であり 高齢の方。  
“か弱い”もの であり 強いもの。  
白くてふわふわしているもの であり 黒くて冷たいもの。

何のためにいのちがあるのか  
答えはわからないけど、  
それを見出すためにいのちがあるんだと思う。

「いのち」は、  
神秘的なもの  
輝いているもの  
ろうそくの火。

あったかくて、ゆらゆらしてて、  
周りを明るくしてくれる…  
でも、  
一瞬で消えてしまったり、  
蠟が溶けていずれ火が消えてしまう…  
決して必ずあるものではなくて、儚いもの。

誕生して初めて外界の空気を吸った時から、  
最期息を引き取る瞬間まで  
いのちは続いていると思う。

生きているみんなが平等に持っているもの  
いのちの重みは同じであると思う。

ご先祖さまの誰がかけても、  
私は産まれてくることができなかった。

とても尊いもの  
守られるべきもの  
重いもの

「いのち」は、  
かけがえのないもの、  
他者が脅かすことをしてはいけないもの。  
普遍的なもの。  
生命であり、精神活動であり、人や物事の本質。

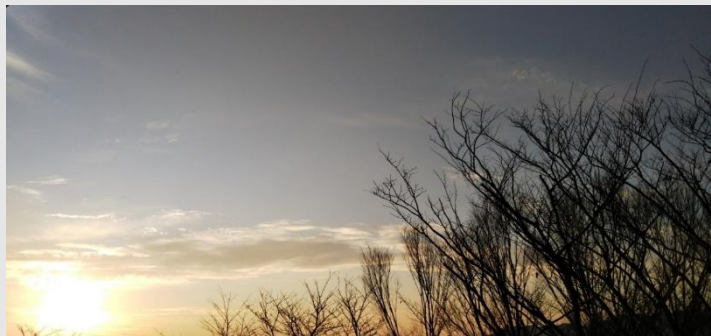
過ぎ去っていくもの、  
止まらない時間の流れ。

「いのち」がなくなるということは、  
「死」を意味する気もするし、  
かといって、  
イコールでは結ばれないような気もする。  
物理的に死んでしまってもいのちは残る。

「いのち」は、  
自身の生き方そのもの。

一つの存在ではないこと、  
他のいのちとのつながり。

何にも変えられない 大切なもの



*dawn*